第42回 作文・図画岩手県コンクール作品集

みんなのよい食プロジェクト
食は、日本の未来。
JAいわてグループ

ごはん お米とわたし

JA岩手県中央会

目次

◆ごあいさつ…… 1
JA岩手県中央会　会長　久保　憲雄

◆図画部門入賞作品…… 2

◆作文部門入賞作品…… 9

◆総評…… 16
審査委員長／元岩手県教育委員会教育委員長　八重樫　勝

◆図画部門を審査して…… 16
元岩手県図画工作・美術協議会　会長　伊藤　満久

◆作文部門を審査して…… 17
盛岡市教育委員会学校教育課　指導主事　山下るり子

◆コンクール入賞一覧…… 18

◆コンクール概要…… 22

図画・作文各部門

１部：小学校１～３年
２部：小学校４～６年
３部：中学校１～３年

ごあいさつ

JA岩手県中央会
会長　久保憲雄

第四十二回「ごはん・お米とわたし」作文・図画コンクールに、作品をご応募いただきましたみなさまにお礼を申しあげますとともに、入選された方々には心からのお祝いを申しあげます。

このコンクールは、子どもたちに、お米やごはん食がどのように作られ食卓に並んでいるのか、そして、稲作が地域において、どんな役割を果たしているかなどを知っていただくことを目的として、昭和五十一年から実施いたしております。

四十二回目を迎えた今回も、県内各地から作文一三一点、図画二四九点もの力作が寄せられました。この中から全国コンクールにおいて、作文部門と図画部門から一点ずつ優秀賞に選ばれました。本当におめでとうございます。

みなさまから寄せられた作品を拝見いたしますと、農家から教わりながら田植えを体験する姿やおいしそうにおにぎりをほおばる姿、また、家族と一緒に食事を作る様子やお米を作る農家、食事を準備する家族への感謝など、日頃の体験や出来事を生き生きと的確にとらえており、素直な感性にあふれていました。

子どもたちの意識の高さに、あらためて目を見張るとともに、日本農業の将来や、ごはん食を中心とした日本型食生活の継承に、大きな期待を抱くことができました。

JAグループは、心と体を支える食の大切さと、それを生み出す農業の力を伝え、国産・地元産農畜産物や、農業のファンになっていただこうという取り組みを進めています。

このコンクールをきっかけに、家族で食卓を囲むことの幸せを感じたり、お米を作る農家の思いを知り、自分たちが暮らす地域農業について考えたことは、とても貴重な経験となったのではないでしょうか。

自然や家族、友人を大切にする気持ちや、地域の人たちへの感謝、伝統ある食文化への敬意、そして、心を込めて育てられたお米のおいしさや農業のすばらしさ、岩手の大地に対する感謝の気持ちを忘れずにいてください。

最後に、今回ご応募いただいた学校の先生方をはじめ、保護者や関係者のみなさま方のご支援とご協力に心より感謝を申しあげ、ごあいさつとさせていただきます。

図画部門
3部

全国優秀賞
岩手県知事賞

「田植え体験を通して」

古　川　このみ

大船渡市立綾里中学校　3年

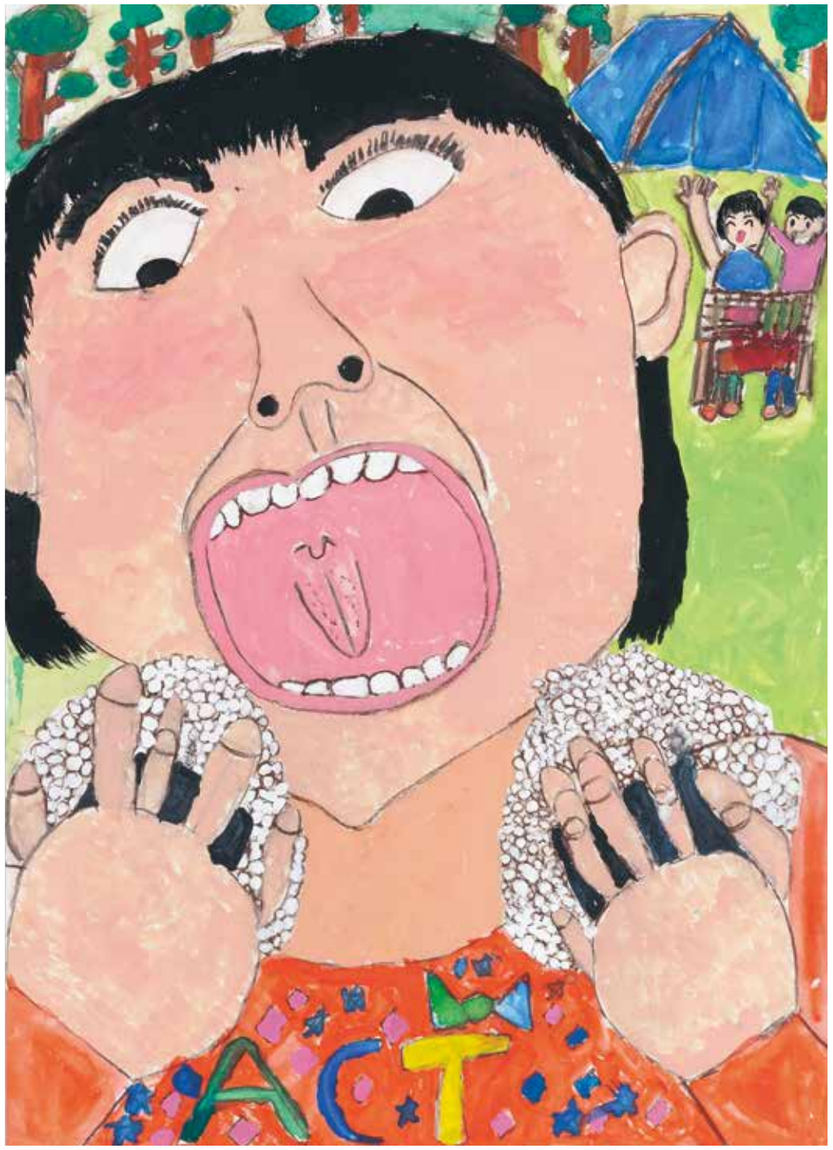
図画部門
1部

岩手県教育長賞

「おいしいおにぎりいただきまぁす！」

松　本　來琉未

九戸村立江刺家小学校　2年



図画部門
1部

ＪＡ岩手県五連会長賞

「ピクニックの主役は、おにぎり」

高　橋　いぶき
北上市立江釣子小学校　３年

図画部門
3部

一般社団法人家の光協会
北海道東北普及文化局長賞

「おいしい思い出」

山　口　聖　菜
大船渡市立第一中学校　２年

図画部門
2部

株式会社日本農業新聞東北支所長賞

「元気に田植え」

佐藤　優璃亜

北上市立和賀東小学校　4年

図画部門
1部

優秀賞

「おにぎり　大好き」

小原　紬

北上市立江釣子小学校　2年

図画部門
3部

優秀賞

「友達とお昼」

畠山千陽
盛岡市立見前中学校　1年

作文部門
1部

全国優秀賞
岩手県知事賞

「ぼくの元気はごはんから」

伊藤優太
花巻市立湯本小学校　3年

ある日、お母さんがぼくの茶わんを見て、

「ごはん、一つぶのこってるよ。」

と言いました。その時は、ケチなお母さんだとしか思いませんでしたが、あとで「食べる」ことについて話をしてくれました。すると、

「私たちが食べている食材の一つ一つは汗を流しながら作ってくれる人がいて、豚、牛、鳥も食べられるようにさばいてくれる人がいて食べられるんだから、食べることに感しゃして食べなさい。」

と言われました。豚や牛がころされてしまうということを考えたことがなかったので、正直人間はひどいことをするなあと思いました。でも、そのおかげで人間は生きているんだということを知りました。

ぼくは、お母さんが作るおにぎりが大好きです。なぜなら、何の具が入っているか楽しみがあるからです。弟たちと一つずつ分けて何が入っているか当てっこです。それが楽しみでおにぎりをもぐもぐ食べます。あ～ぼくのはうめぼし。弟はこんぶ、妹はサケで当たり。みんなでわいわい楽しいな。ごはんって、カレーライス、オムライス、おにぎり、おもちなど、何にでも合ってとても大好きです。

ぼくはいつもお母さんに

「よくかんで食べなさい。」

と言われます。おいしい物はつい早食いになってしまいます。一つぶの米を三十回かんでみてと言われ食べてみました。三十回かむ前にとけてしまいましたが、あまくてふしぎな味でした。米の成分のほとんどは、たん水化物のでんぷんで出来ていてあまいんだそうです。みんなは米の味を知っていますか？

ぼくは、お米や肉・魚・野さいなど一つ一つ作っている人の思いを感じながら、食べ物の大切さ、ありがとうという気持ちをわすれずに、毎日ごはんをしっかり食べて大きくなりたいです。

作文部門
2部

岩手県教育長賞

「受けつがれてきたお米作り」

菊池明莉
奥州市立木細工小学校　6年

「バラバラバラ。」
種もみが、春男さんの手から落ちていきました。もみのにおいがフワァンとして、ケースの小さなすき間に入ります。
「雨がふる音みたい。」
私の好きな音です。
お米作りを教えてくれる春男さんの家で、初めて種もみをまき、苗作りをしました。去年しゅうかくしたお米の一部を保存しておいた物です。少し前に水をかけ、芽出しをしていました。お米のつぶにさわると、ザラザラ、ボコボコしています。黄土色のひまわりの種の赤ちゃんみたいで、かわいいです。
春男さんの手本が終わると、
「明莉さんがら、やってみろ。」
ドクン、ドクン。心臓の音が聞こえてきて、きん張しながら種をまきました。
「上手、上手。」
春男さんにも先生にもほめられました。
すき間に入れたら、はみ出しているお米を筆でならします。どのみぞにもしっかりもみが入ったら、ケースの上をずらします。
「ジュボッ。」
土の上にもみがきれいに並びました。
「すっきりする。」
赤ちゃんの種もみが土の上にねているみたいです。今度は赤ちゃんに土の布団をかけます。ハンドルを回すとベルトが動き、
「パラパラパラ。」
と土がかかります。種もみが見えなくなるくらいしっかりかけたら出来上がりです。
「ああ、楽しい。気持ちいいね。」
一緒に作業した四年生も楽しそうです。
こうやって、一から育てた苗を植えたり観察したりしていると、一つ一つの成長がとてもうれしく感じます。肥散らしや代かき、田植えなどの作業も赤ちゃんを育てるときのように大切なことが分かります。お米がどんな味なのか去年よりも楽しみです。
魚つかみの時に、地域の方が古代米をおにぎりにして持ってきてくれました。古代米を調べてみると、日本では、黒米や赤米などと呼ばれ、白い米の品種より古くから作られていると分かりました。おにぎりの味はあまくておいしかったです。縄文時代から米作りが受けつがれていると知りおどろきました。
私は六年生になって初めて、種もみをまくというところから米作りをしました。一つぶのお米から芽が出て、苗になるところを初めて見ました。そしてそれが成長し、新しいお米になります。お米ってなんだかすごいなあと思いました。
木細工小学校の先ぱい達が大切に育てたお米を今度は、私が育てるし、私が卒業しても下級生のみんなが受けついで育ててくれます。私が生まれるずうっと前から受けつがれてきたお米作りを、この先も、ずうっと先も大切に受けついでいってほしいです。

作文部門
3部

ＪＡ岩手県五連会長賞

「母のおにぎり」

黒澤　夢
一関市立桜町中学校　2年

「まだかなぁ。」
試合がある日、その一言で僕の一日は始まる。どんなことがあっても、母のおにぎりほど楽しみなものはないからだ。昼が来るのが待ち遠しい。そして、そのおにぎりにくらいつき、最初に出る言葉は「うまっ。」という一言だ。
サッカーの練習試合があったある日、久しぶりの母のおにぎりにワクワクした。ここ最近の試合では、コンビニの弁当が続いていたからだ。じっくり味わおうと思っていた矢先、
「次の試合がすぐだから、早く食べろよ。」
とコーチから指示があった。がっかりしながら、さっさとおにぎりをほおばった。
「うまっ。」
ゆっくり食べても、早く食べても、出てくる言葉は一緒だ。母のおにぎり効果か、午後の戦績はすこぶるよかった。
母のおにぎりのおいしさの秘密を知りたくて、僕は母の手元をじっと観察した。そんな僕に母は、
「どうしたの。」
と話しかけてきた。僕は黙って見ていた。僕が母の作るおにぎりのおいしさの理由を追及するようになって数ヶ月後、「事件」は起きた。
「あぁ！お米炊くの忘れてた！」
慌てたように母は高い声を上げた。とっさに、僕に向かって、
「コンビニ弁当でいい？」
と申し訳なさそうに言った。内心がっかりしながら、
「いいよ。」
と僕はうなずいた。
「昼になったら弁当を届けるよ。」
と言って、母は僕を試合会場まで送ってくれた。何の楽しみもないまま試合を終えた。いつもの自分に比べて、動きが鈍っていた。落ち込んでいたとき、母が現れた。
「頑張って。」
と言葉をそえて、弁当袋をさし出した。弁当袋に手を入れると、温かいものが手に当たった。取り出してみると、僕の大好きな、母の作ったにぎりたてのおにぎりだった。おにぎりをほおばり、ゆっくりかみしめた。
「うま！」
いつもと変わらずとてもおいしい。急に元気がわいてきた。米を炊き直して、お昼に間に合わせてくれた母のことを考えると、なおさらやる気も出てきた。おにぎりを食べた後の試合は調子がよかった。
「ありがとう。」
試合後、僕は母に伝えた。母は、にこっと笑顔を返してくれた。
「米炊き忘れ事件」から一週間が経った頃、僕は母に聞いた。
「何でお母さんの作るおにぎりはうまいの？」
母は笑いながら、
「知らないよ。」
と言った。今まで、中身の昆布や梅干しのおかげでおいしくなっていたのではないかと思っていたが、どうやらそれが理由ではないらしい。「何でなんだろう。」としばらく考えて、ふと気がついた。そういえば、母はおにぎりをにぎっているとき、「おいしくなれ、おいしくなれ。」と言いながら握っていたことを思い出した。もしかしたら、母の思いがおにぎりをあんなにおいしくしてくれていたのではないか。そして、僕にパワーを届けてくれていたのではないか。
母のにぎるおにぎりがおいしい理由を知ってから、僕は毎回感謝しながら食べるようにしている。これから先どんなことがあっても、母のおにぎりがあれば何でも乗り越えていける気がする。
「よし、がんばるぞ。」
母の作ってくれたおにぎりを弁当袋に入れて、僕は今日も試合会場に向かって歩き出す。

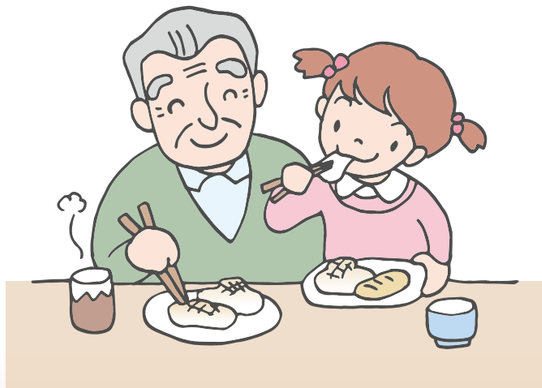
作文部門
1部

一般社団法人家の光協会
北海道東北普及文化局長賞

「おもち作り」

菊池　苺
奥州市立木細工小学校　3年

「おもち作りするぞぉ。」
じいちゃんの大きな声がした。お正月の朝、わたしの家ではおもちを作る。
　丸くて白いもち米。はちみつをあげているおじちゃんの家からもらってきた。ボールに入れてうるかす。こうしておくと、ふんわりおいしいおもちになるんだって。水の色が白くなったら、手でゴシゴシあらう。指を立てて回してあらう。これは、母ちゃんが教えてくれた。ザラザラザラザラ。きかいにもち米を入れた。
「スイッチ、オン。」
横でじっと見ていた妹のゆいが赤いボタンをおした。赤がスタートで白がストップボタン。まい年手つだいをしているから妹だってできるんだ。ガッガッガッ。回りはじめたきかいの音。米つぶがどんどんやわらかくなる。バラバラだったお米が一つにまとまってきた。ポコン、ポコンとおもちがふくらんでくる。三才の妹のおなかみたい。モチモチしてきた。
「一回止めろ。」
白いボタンをゆいがおす。じいちゃんがふたを開けてたしかめる。白いゆげがモワァッと広がる。おもちのおいしそうなにおい。
「米つぶがのごってるから、ただげ。」
ゆいがすりぼうでたたく。やわらかくなって二つにわれた。
「もう一回、スイッチオン。」
今どはつぶもなくきれいに丸くなる。
　大きなさらにこなをしき、その上にもちを出す。メタアッと流れて広がる。じいちゃんは、手にこなをつけてもちを小さく丸める。あついのに、すごいなあ。丸めたもちが、きなこの中に入れられる。まっ白だったおもちが黄土色にへんしん。一口食べたら、あまくてモチモチやわらかい。わたしも、家族のみんなもおかわりを何回もした。じいちゃん、来年もおいしいおもち作りをやろうね。



作文部門
3部

株式会社日本農業新聞東北支所長賞

「大好きなごはん」

齊藤　そら
花巻市立南城中学校　1年

　私は、ごはんが大好きです。もちろん味も好きですが、私がごはんを大好きなのには、理由が二つあります。
　一つ目の理由、それは、ごはんに関しての思い出です。私は、小学校五年生、六年生と、JAのおにぎり大会に出場しました。五年生の結果は努力賞でした。
　そして、昨年のリベンジとして六年生も出場することにしました。二回目は、もっと農家の人たちが一生懸命育ててくれたこと、その他にもたくさんの人たちが関わって、私たちが毎日ごはんを食べられること、に感謝しながら、心をこめてつくりました。仲間と案を出し合って、賢治先生の作品をモチーフにしたおにぎりを作ることに決めました。
　結果は優秀賞でした。最優秀賞には惜しくも届かず、残念でした。でも、チームで心を一つにして作ることができ、とてもいい思い出になりました。
　おにぎり大会を通して、学んだことがあります。それは、お米は「心」でつながっているということです。農家の人たちが「心」をこめてお米をつくる。そのあと、お米は農協に行って、お店に行きます。農協もお店も、いいお米を提供しようと「心」をこめて売ってくれる。そしてそれぞれの家庭に行って、ごはんを作る人が「心」をこめて炊いたり、調理したりする。最後に、ここまでつながってきたやさしい「心」に感謝の「心」をもちながら、ごはんを食べる。「ここまで『心』でつながってきた。」そう思うと、お米の一粒一粒を大事に食べようという気持ちになります。おにぎり大会で学んだ、「心」のつながりが、ごはんを大好きになった理由の一つです。そして私は「心」のつながりを感じながら、今日も、そしてこれからも、ごはんを食べます。
　二つ目の理由は、毎日のごはんがおいしいことです。
　私は、今となっては少し慣れてきていますが、中学校に入ってすぐの頃は、小学校と違うことがたくさんあって、毎日が大変でした。それに加えて慣れない、つらい部活動で、毎日毎日くたくたになって帰っていました。「ただいま」を言う元気もないほど疲れきって帰った時、私を救ってくれたのは、ごはんです。家に入るとごはんの匂いがふわんと広がります。そして、ごはんをおかずと一緒に口に入れると、ごはんの味が口いっぱいに広がります。それと同時に、幸せも口いっぱいに広がります。ごはんと幸せをつめこむと、どんなに疲れていても、落ちこんでいても、かむたびに元気が出てきます。ごはんは、一日の疲れをなくして、明日への元気をくれます。
　そんなおいしいごはんを食べている時、ごはんを作ってくれるお母さんの気持ちを考えます。お母さんも仕事で疲れているのに、私たち家族が明日も元気に頑張れるように、栄養などにも気をつかいながら、毎日こんなにおいしいごはんを作ってくれてる。そう考えると、お母さんへの感謝の気持ちがわいてきます。同時に「家族って、あったかいなぁ。」と思います。今日も家族みんなで食卓を囲み、家族みんなでごはんを食べられる。そんなことを考えながら食べると、幸せな気持ちがこみ上げてきて、ごはんがもっともっとおいしくなるような気がします。家族みんなでごはんを食べる、そんな幸せな時間を大切に、これからも毎日家族とごはんを食べていきたいです。明日への元気をくれ、幸せな時間をくれることが、私のごはんが大好きな二つ目の理由です。
　ごはんは、一粒一粒に「心」がこめられていて、「心」でつながっていて、明日への元気と幸せな時間をたくさんくれます。私は、そんなごはんが大好きです。

作文部門 1部

優秀賞

「ママとお米とぎ」

菊池智果
奥州市立木細工小学校　3年

「米とぎしていい。」
ママに聞いたら、
「いいよ、やろう。」
ママがニコニコの顔で答えてくれました。やってみたら、とぎじるといっしょに、お米が流れてしまいました。お米をとぐのはむずかしいなあと思いました。でも、何回もやったらお米を流さないでとげるようになりました。
「上手になったね。」
お母さんにニコニコのえ顔でほめられました。
「ありがとう。」
わたしもニコニコのえ顔で答えました。何どもお米をといだので、手がだんだん赤くなってきました。
「つかれたから、休んでいい。」
「いいよ。後は、ママがやるからね。」
ママのそばで見ていると、やっぱりママは、上手だなあと思いました。
ごはんがたけて、すいはんきのふたを開けました。白いゆげがいっぱい上がりました。ごはんのいいにおいが、フワァンと鼻に入ってきました。一つぶ一つぶがみんなまっ白で立っていたり、ねていたり、ななめにおきていたりして、テカテカ光っていました。とってもとってもおいしそうでした。
茶わんによそってみんなにわたして「いただきます」をしました。

「おいしい。」
パパがほめてくれました。うれしかったです。わたしも食べました。ごはんは、モチモチして、フワフワして、ほかほかでした。ごはんは、おいしいなあと思いました。わたしは、いっぱいおかわりをしました。
わたしは「お米とぎをしてよかったなあ。これからも、お米とぎをやりたいなあ。」と思いました。ママのようにお米の一つぶ一つぶを大切にして、むだに流さないように、じょうずにとげるようになりたいです。

作文部門 2部

優秀賞

「みんながつながるお米」

畠山史子
大船渡市立盛小学校　4年

私の一番好きな食べ物は「梅干し」です。毎年夏にお母さんといっしょに梅と塩をつけこんで作ります。手作りの梅干しはとてもおいしく、うどんやそうめんに入れても良いけれど、やっぱり一番はごはんといっしょに食べることです。梅干しのおいしさもごはんのおいしさも両方ともふくらみます。
私は将棋が好きで、いろんな大会に参加します。将棋の大会は「お米」が賞品になることが多いです。私はお米目当てで参加することもあるくらい、お米も大好きです。
将棋の大会で賞品になるお米は、スーパーなどで買ってきたものではなく、地元でとれたお米です。お米がとれた秋に大会を開き、新米が賞品になることもあります。
だから、お米が賞品になる大会はどこでも大会長さんが、「地元でとれたおいしいお米を味わってほしいです。みなさん、がんばってください。」と自信にあふれたあいさつをします。そういう大会では、入賞した人だけでなく、参加者全員に参加賞として少しずつ配られることがあります。中には、三十位とか四十位になるとビタリ賞でお米が五キログラムいただける大会もあります。
私は強い人に負けることが多いので、負けてもお米がいただけるとうれしいです。いっしょに参加したお兄ちゃんの分ももらって帰り、お家で炊いてお父さんとお母さんといっしょに食べます。大会長さんが自信をもって参加者全員にくださったお米は、とてもおいしいです。またがんばろうと思います。
私は今年の一月に、お兄ちゃんと一緒に東京のお米屋さんから話を聞きました。おいしくて安全なお米をお客さんに届けて、味わってもらうためにたくさんの工夫をしていることを学びました。心のこもった話を聞いて、すごいと思ったのと同時に、将棋の大会で会うお米屋さんも同じように話していたのを思い出しました。
私の家では、お米屋さんからだけではなく、農家の方から買うこともあります。その農家の方に田植えや稲刈りを体験させてもらったこともあります。農家の方も、おいしくて安全なお米を作るためにとても努力していることを話してくださいました。
将棋の大会でお米が賞品になる時、大会長さんも力を込めてお米の説明をしますが、会場からも「やったあ」「絶対もらうぞ」という声が上がります。もちろん、一番大きな声を上げるのは私ですが、おじさんたちも、子どもたちも、応援のお母さんたちも大きな声でよろこびます。作る人も売る人も買う人ももらう人もみんなが幸せな気持ちになれるのがお米のすばらしさだと思います。おいしいだけでなく、みんながつながるお米をこれからもしっかり味わって食べたいです。

総評

審査委員長
元岩手県教育委員会
教育委員長
八重樫　勝

四十二回目の「ごはん・お米とわたし」作文・図画コンクールに、小中学生の皆さんから、今年も多くの応募がありました。

わくわく、どきどきしながら楽しく審査しました。すばらしい作品が多く、白熱した審査会になりました。

全体を通して、どの作品も自分が体験したことや自分の目で見たこと、感じたこと、思いなどをみずみずしい感性を生かして表現していました。

家族と楽しそうに食事をしている様子やみんなで農作業に取り組んでいる様子、祖父母の知恵を学んでいること、日本の農業について考えたことなどがよく伝わってきました。

全国コンクールでは、作文部門、図画部門で優秀賞各一点が選ばれ、岩手の作品のレベルの高さが評価されました。

県コンクールで各賞に選ばれた皆さん、受賞おめでとうございます。指導された先生方、ご家族の皆さんにもお祝い申しあげます。

学校奨励賞は作文部門で奥州市立木細工小学校、図画部門で北上市立江釣子小学校が受賞しました。両校ともたくさんの優れた作品を応募していること、学校ぐるみの取り組みをしていることが高く評価されました。おめでとうございます。

〈図画の部〉

- 田づくりから稲刈り、そして、おいしく食べているところまで、主題に即した迫力のある作品が多く、表情の豊かさなど感性のすぐれた伸び伸びとした描き方をしている。
- 一部から三部まで発達段階に沿った描写がよく分かり、特に一部の作品はおいしそうに食べている顔のうれしさが伝わってくる。
- 三部の作品は、主人公とそれを生かす背景、人物の正確なデッサン力等すばらしい表現技術、重色や混色を駆使した濃密な色使い等、完成度の高い作品になっている。

〈作文の部〉

- ごはんやお米にまつわる「出来事」を家族とのふれあいを通して、生き生きと表現している。五感を使った表現で臨場感あふれる作品が多かった。
- ごはんやお米に対する思いや考えを、自分の体験や調べたことを通して文章の組み立てを工夫しながらまとめている。
- 中学生は食や家族に対する感謝の念や日本の食文化を尊重する考え等を、文章の構成や表現の工夫によって効果的に書いている。
- 誤字脱字、原稿用紙の使い方等に気配りが必要な作品もあった。

小中学生の皆さんは、学校や家庭、地域でやることがいっぱいあり、忙しい毎日と思います。その中でこのコンクールに応募してくれたこと、とてもうれしいです。

これからも友達の作品や他の作品に触れ、自らの感性や言葉を磨き、自分の作品作りに生かして下さい。来年もたくさんの応募を期待しています。

図画部門を審査して

元岩手県図画工作・美術協議会
会長
伊藤　満　久

受賞おめでとうございます。年ごとに応募作品の質が向上し、先生方の児童生徒の豊かな感性を引き出して表現に結びつける熱心なご指導の賜と感謝しながら審査致しました。

図画部門には二四九点（勿論多くの作品は校内選考を経たレベルの高いものです）の応募があり、全国には九点を推薦しました。その結果全国七万二千余点の中から優秀賞に一点入賞しました。（全国の優秀賞は四十五点です）

ここでは県審査で受賞した優秀賞以上の作品について選評いたします。

全国で優秀賞を受賞するとともに、岩手県知事賞を受賞した古川このみさん（大船渡市立綾里中三年）の「田植え体験を通して」は、中腰の姿勢等デッサンが完璧で、植えている手先と目との一体感、温かい主調色のまとまり、そして近景と遠景の画面構成と色彩の濃淡の工夫等、完成度の高いすばらしい作品です。

次に岩手県教育長賞受賞の松本來琉未さん（九戸村立江刺家小二年）の絵は、画面いっぱい溢れるばかりにおにぎりを食べている人物の力強さが大変迫力があり、まさに題名ぴったりの力作です。

ＪＡ岩手県五連会長賞を見事受賞した髙橋いぶきさん（北上市立江釣子小三年）の「ビクニックの主役はおにぎり」は、最後にほおばっている三人の笑顔の満面から、笑い声まで聞こえてきそうな温かさの感じる作品です。

家の光協会北海道東北普及文化局長賞を受賞した山口聖菜さん（大船渡市立第一中二年）の作品「おいしい思い出」は、田植えの苦労を思い出しながらおにぎりを食べている二人の笑顔、背景に描かれた精緻な家屋等完成度の高い秀作です。

日本農業新聞東北支所長賞受賞の佐藤優璃亜さん（北上市立和賀東小四年）の「元気に田植え」は、苗を植えている真剣な表情を前方の視点から描いている臨場感迫ってくる表現で、背景にも友達を描き入れる等効果的にまとめています。

優秀賞の小原紬さん（北上市立江釣子小二年）の作品「おにぎり大好き」は、おにぎりを握っている手を大きく描き、元気いっぱいを強調している友達を中心にして、おいしそうな食物も沢山描き入れて楽しい雰囲気が伝わってくる、明るさいっぱいの絵です。同じく優秀賞の畠山千陽さん（盛岡市立見前中一年）の作品は、向かい合っている二人の、おにぎりを食べながら談笑している様子がよく分かり、背景の人物の動的なデッサンもしっかりした中学生らしい力作です。

学校奨励賞は北上市立江釣子小学校です。当校は応募数、入賞数も多く（佳作も含めた入賞数は八作品）、学校全体で取り組んでいることが高く評価されました。

日本の農業を支える主食である、お米づくりの大切さを知ってもらおうと実施している本コンクールは伝統として定着しております。次代の農業を担う後継者養成の視点からも大変意義ある事業です。今後も絵に表すことを通して、豊かな情操が育まれることを期待し選評といたします。

作文部門を審査して

盛岡市教育委員会
学校教育課指導主事
山下　るり子

本作文コンクールに、今年度も多くの学校、児童生徒の皆さんが応募してくださいました。応募作品が増加したこと、どの作品も、自分の生活と「ごはん・お米」との関わりについて、五感を通して感じたこと、考えたことをしっかりと綴っていることに嬉しさを感じます。

全国の優秀賞と岩手県知事賞を受賞した伊藤優太さん（花巻市立湯本小学校三年）の「ぼくの元気はごはんから」は、お母さんから聞いた「食べる」ことについてのお話をもとに、ごはんのおいしさと、食材への感謝について考えを深め、しっかりとした構成と表現でまとめられた、大変優れた作品です。

岩手県教育長賞を受賞した菊池明莉さん（奥州市立木細工小学校六年）の「受けつがれてきたお米作り」は、稲作体験を通して、お米に対する思いを深め、「稲作」の歴史やこれからについて考えたことを、素直な表現で綴った好感の持てる作品であり、明莉さんの温かい人柄まで伝わってくる秀作です。

ＪＡ岩手県五連会長賞を受賞した黒澤夢さん（一関市立桜町中学校二年）の「母のおにぎり」は、部活動であるサッカーの戦績すら左右するほどの「母のおにぎり」をめぐって、母と息子の絶妙な距離感と、お互いの愛情の深さが、中学生の視点と本音で巧みに構成された、読み応えのある力作です。

家の光協会北海道東北普及文化局長賞を受賞した菊池苺さん（奥州市立木細工小学校三年）の「おもち作り」は、おじいちゃんを中心とした家族みんなでのおもち作りを、五感を使った表現で、家族やつきあがるおもちの様子を生き生きと書き表し、臨場感あふれる作品となっています。

日本農業新聞東北支所長賞を受賞した齊藤そらさん（花巻市立南城中学校一年）の「大好きなごはん」は、おにぎり大会に参加した経験や、家族そろっての夕食での思いをもとに、「ごはん」に込められた「心」のつながりを、素直な表現でまとめた、読み手を温かい気持ちにする作品です。

優秀賞を受賞した菊池智果さん（奥州市立木細工小学校三年）の「ママとお米とぎ」は、お米とぎの経験をもとに、お母さんへの感謝と尊敬の思い、ごはんへの特別な思いを膨らませていく気持ちの流れが、会話文や様子を表す言葉を使いながら上手にまとめられた作品です。

同じく優秀賞を受賞した畠山史子さん（大船渡市立盛小学校四年）の「みんながつながるお米」は、将棋大会でもらう賞品の新米と、それに関わる人たちのお米に対する思いをもとに、お米は「みんなをつなげ」「みんなを幸せにする」という考えを深めていく、個性的な視点の作品です。

学校奨励賞は、奥州市立木細工小学校です。当校は本作文コンクールへの取組を継続し、今年度も八作品応募され、全作品が入賞した実績が高く評価されました。

入賞作品は勿論のこと、応募された多くの作品から、日本の主食であるお米への感謝の気持ち、温かな家族への愛情、そして、稲作を大事に継承する郷土への愛着がよく伝わってきました。今後も、多くの子どもたちが主体的に「ごはん・お米」に関する様々な体験を行い、表現する機会を大切にしていただくことを期待して、講評といたします。

図画部門入賞（ずがぶもんにゅうしょう）

【全国コンクール】

◆優秀賞

古川　このみ　大船渡市立綾里中学校　3年　「田植え体験を通して」

【岩手県コンクール】

◆岩手県知事賞

古川　このみ　大船渡市立綾里中学校　3年　「田植え体験を通して」

◆岩手県教育長賞

松本　來琉未　九戸村立江刺家小学校　2年　「おいしいおにぎりいただきまぁす！」

◆ＪＡ岩手県五連会長賞

髙橋　いぶき　北上市立江釣子小学校　3年　「ピクニックの主役は、おにぎり」

◆一般社団法人家の光協会北海道東北普及文化局長賞

山口　聖菜　大船渡市立第一中学校　2年　「おいしい思い出」

◆株式会社日本農業新聞東北支所長賞

佐藤　優璃亜　北上市立和賀東小学校　4年　「元気に田植え」

◆優秀賞

小原　紬　北上市立江釣子小学校　2年　「おにぎり　大好き」

畠山　千陽　盛岡市立見前中学校　1年　「友達とお昼」

◆学校奨励賞

北上市立江釣子小学校

◆佳作

【1部】

佐々木　直　内川目小　1年　「ごはんを　たくさん　たべるぞ」

佐々木珠莉　内川目小　1年　「ごはん　もりもり　たべるぞ」

秋葉　萌衣　江釣子小　3年　「お弁当は、　おにぎりが一番」

井上　優芽　江釣子小　3年　「桜の木の下で　食べるおにぎりは最高」

伊東　花梨　黒沢尻北小　3年　「おにぎりおいしいね」

大竹　椿姫　岩谷堂小　3年　「かんしゃして　いただきます」

【2部】

高橋　優斗　和賀東小　4年　「みんなで田植え」

藤原　凰太　江釣子小　5年　「わたしも　食べたい」

伊藤　陽夏　江釣子小　6年　「おいしいおにぎり　いただきます」

田村　詩桜　江釣子小　6年　「おいしい米に…」

伊藤　隼人　江釣子小　6年　「ぼくはおにぎりが　大好きなのだ」

菅野　凌雅　真城小　5年　「二人で食べる　おいしいおにぎり」

袖野　美咲　舞川小　4年　「楽しい　すしめしづくり」

西城　美希　小梨小　5年　「おにぎり大好き」

【3部】

髙橋　馨　下橋中　2年　「残したい　大切な思い出の風景」

安倍　尋人　見前中　1年　「母への感謝」

一戸　美咲　見前中　1年　「私と姉のおにぎり」

藤原　麗　北上中　2年　「今日のお昼ご飯」

下田　義経　綾里中　1年　「収穫の笑顔」

作文部門入賞（さくぶんぶもんにゅうしょう）

【全国コンクール】

◆優秀賞

伊藤優太　花巻市立湯本小学校　3年　「ぼくの元気はごはんから」

【岩手県コンクール】

◆岩手県知事賞

伊藤優太　花巻市立湯本小学校　3年　「ぼくの元気はごはんから」

◆岩手県教育長賞

菊池明莉　奥州市立木細工小学校　6年　「受けつがれてきたお米作り」

◆ＪＡ岩手県五連会長賞

黒澤夢　一関市立桜町中学校　2年　「母のおにぎり」

◆一般社団法人家の光協会北海道東北普及文化局長賞

菊池苺　奥州市立木細工小学校　3年　「おもち作り」

◆株式会社日本農業新聞東北支所長賞

齊藤そら　花巻市立南城中学校　1年　「大好きなごはん」

◆優秀賞

菊池智果　奥州市立木細工小学校　3年　「ママとお米とぎ」

畠山史子　大船渡市立盛小学校　4年　「みんながつながるお米」

◆学校奨励賞

奥州市立木細工小学校

◆佳作

【1部】

田村大輝　城南小　1年　「たんぼのおてつだい」

竹花紀慧　水沢小　3年　「一生けんめい育てた お米をありがとう」

菊池美桜　木細工小　3年　「ママのおべん当」

菊池優花　木細工小　3年　「ママのカレーライス」

菊池紗央理　木細工小　3年　「みんなをえ顔に」

佐藤結衣　永井小　1年　「かぞくみんなで たねまき」

【2部】

嵯峨那由花　大新小　4年　「お米のありがたみ」

佐々木花愛　鱒沢小　5年　「私にとって大切なお米」

菊池怜史　木細工小　4年　「くるみもち作り」

菊池望夢　木細工小　4年　「初めての赤はん作り」

作並希星　油島小　4年　「おいしいお米」

千田小梅　興田小　5年　「お米について わたしが考えたこと」

【3部】

小林真緒　北松園中　2年　「残食０」

菅原結菜　花泉中　2年　「言葉と力」

星野那奈　一関一高附属中　1年　「お米のおいしさと大切さ」

小川朋華　一関一高附属中　2年　「祖母のおにぎり」

渡部仁奈　一関一高附属中　3年　「『特別』なお米」

髙橋啓　一関一高附属中　3年　「『断シャリ生活』から 考える米の魅力」

小林祐希　金田一中　1年　「今につながる米の文化」

舩渡茜　宿戸中　2年　「私と二人を繋げる〝感謝〟のお米」

第 42 回「ごはん・お米とわたし」

作文・図画岩手県コンクールの概要

応　募　点　数

学　校	作　文	図　画	合　計
小学校	17	219	236
中学校	114	30	144
計	131	249	380

応　募　締　切　日

平成29年９月８日

県コンクール第１次審査会

平成29年10月10日（全国コンクール推薦作品18点を決定）

県コンクール第２次審査会

平成29年12月７日

表　彰　式

平成30年１月24日　盛岡市「ホテルルイズ」

主　催

岩手県内ＪＡ・ＪＡ岩手県中央会

後　援

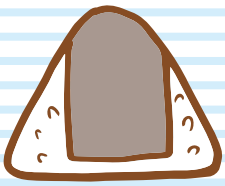
岩手県・岩手県教育委員会・いわて純情米需要拡大推進協議会
一般社団法人家の光協会北海道東北普及文化局・株式会社日本農業新聞東北支所
ＪＡ岩手県信連・ＪＡ岩手県厚生連・ＪＡ全農いわて・ＪＡ共済連岩手

審　査　員（敬称略）

審査委員長	八重樫　勝	元岩手県教育委員会教育委員長
審査委員	伊藤満久	元岩手県図画工作・美術協議会会長
審査委員	山下るり子	盛岡市教育委員会学校教育課指導主事
審査委員	平間　聡	(一社)家の光協会北海道東北普及文化局局次長
審査委員	山口　武	(株)日本農業新聞東北支所副支所長
審査委員	小原　繁	岩手県農林水産部県産米戦略室県産米戦略監
審査委員	鈴木邦彦	ＪＡ岩手県信連代表理事専務
審査委員	橘　幸広	ＪＡ岩手県厚生連常務理事
審査委員	畠山俊彰	ＪＡ全農いわて県本部長
審査委員	小原市右エ門	ＪＡ共済連岩手県本部長
審査委員	小澤隆一	ＪＡ岩手県中央会副会長

※このコンクールに対するご意見・ご感想をお待ちしております。

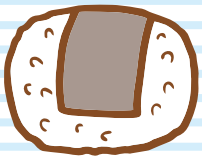
JA岩手県中央会 JA総合対策部 〒020-0022 盛岡市大通一丁目2番1号 TEL019-626-8519
ホームページhttp://www.ja-iwate.or.jp/　Eメールアドレス kouhou@jaiwate.or.jp

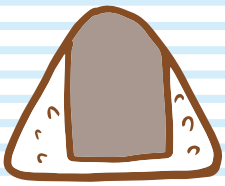


みんなの力で!

がんばろう!岩手

JAいわてグループ





さぁ、みんなで取り組んでいこう。
やっぱり国産農畜産物推進運動
～みんなのよい食プロジェクト～

発行／平成30年1月24日　企画・編集・発行／JA岩手県中央会　印刷・製本／川嶋印刷株式会社